

(寄稿)

NOMURA

## 新たな病院建築・運営に挑む 長崎リハビリテーション病院立ち上げまでの軌跡

長崎リハビリテーション病院は「地域リハビリテーション」の実現を理念に、2008年2月に長崎市の中心部に新築開設された。地域における回復期リハビリテーションのあり方を徹底的に追及し、入念なコンセプト作りの末に完成した病院である。

同院は、ハード面、ソフト面の随所に「病院らしくない」工夫がなされている。まず、建築は、威圧感を感じさせないデザインとなっている。エントランスからロビーに入ると、開放的な雰囲気の中に、リラックスできるオープンカフェのテーブルとイスが目に入り、ミニコンサートが開催できるホールの様なスペースが広がっている。運営面では、白衣を着た職員の姿はなく、職種別にユニフォームが決められており、患者においては、寝巻姿は就寝時のみで、日中は普段着で過ごすことになっている。これらは「病院らしくない」象徴的な一面であるが、ここに挙げたのは、ごく一部に過ぎない。

急性期、回復期、在宅医療を含めた慢性期など病期で分類された医療体制の中、同院は、たとえ病期が異なっても、急性期治療から地域生活に確実につなげるという強い使命感があり、実はそれが「病院らしくない」につながっている。

回復期は、「生活を再建する場」として、“リスク管理下で障害の改善と生活の再建”を担うのが主たる役割として、同院では、多職種チームによる情報と目標を共有し、全方向からサポートする体制を構築している。その中には、口腔ケアの重要性から医科歯科連携の場として、歯科オープンシステムも含まれている。多職種チームは、本来の役割を果たすための組織形態を取っており、看護部やリハビリ部などの縦割り組織を排して、全ての専門職を病棟専従とし、臨床部の所属となっている。

本稿は、一般社団法人是真会長崎リハビリテーション病院 栗原正紀 理事長に寄稿いただき、長崎リハビリテーション病院のハード面からソフト面に至るまで、回復期リハビリテーションの実践的な取り組みを紹介いただいた。

長崎リハビリテーション病院は開設から12年経つが、その間、栗原理事長は単独の回復期リハビリテーション専門病院として、地域になくはならない存在になることを目指し、挑戦を続けて来られた。本稿では、これまでのリハビリテーション医療を取り巻く環境や課題を振り返り、新築・開設する際に、リハビリテーション病院のあり方として拘った点にも触れつつ、現在の姿も紹介いただいた。さらに、地域を支える組織や活動についても、詳しく解説いただいている。「病院らしくない」長崎リハビリテーション病院は、単に奇をてらったものではないことをよく理解いただけたと思う。

これから、建て替えを検討される病院も多いと推察されるが、その前に本稿を一読されることをお勧めする。

(市川)

2020年5月25日

Healthcare note

(No. 20-05)

寄稿者名：  
一般社団法人是真会  
長崎リハビリテーション病院  
理事長 栗原 正紀

編集主幹：  
野村ヘルスケア・  
サポート&アドバイザー  
市川 剛志

野村證券株式会社  
金融公共公益法人部